

スピリチュアル・ターン以降のバスカーの思想について
—ニュー・エイジ思想、ニュー・レフト運動、そして神智学—

Bhaskar's Thought After Spiritual Turn
-New Age Thought, New Left Movements, and Theosophy-

水谷 覚
Satoru Mizutani

Abstract

This paper is organized as follows. Chapter I introduces the purpose of this paper. Chapter II shows the development of Bhaskar's thought and its evaluation. Chapter III shows the turning point and the theme of Bhaskar's spiritual turn. Chapter IV shows the relation between Bhaskar's thought after spiritual turn and New Age thought or New Left movements. Chapter V shows the relation between Daisetz Taro Suzuki and Bhaskar, and the influence of theosophy on their thought and praxis. Chapter VI shows Bhaskar's thought was developed as his personal praxis and we can understand his thought through our everyday thinking, that is secularism.

Keywords : Roy Bhaskar, spiritual turn, New Age Thought, New Left Movements, Theosophy, Daisetz Taro Suzuki, secular Bhaskarian

【目次】

- I はじめに
- II バスカーの思想の変遷とその評価と
- III スピリチュアル・ターン
- IV ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動と
- V 鈴木大拙とバスカーと神智学と
- VI おわりに

I はじめに

本稿の目的は、スピリチュアル・ターン以降のバスカー (Bhaskar, R.) の思想の転回と展開とについて、ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動との展開をふまえつつ探究し再評価することにある。また、スピリチュアル・ターン以降のバスカーの思想について、特に日本の思考によって接近するために、鈴木大拙の思想や生涯をバスカーのそれと対照させる。

II バスカーの思想の変遷とその評価と

バスカーの思想の展開は、以下のような弁証法的展開 (存在論的 - 価値論的連鎖: the ontological-axiological chain) によって構成される (Bhaskar, 2016, pp.112-114)。

1M: non-identity

2E: negativity

3L: totality

4D: transformative agency

5A: spirituality

6R: (re-) enchantment

7A/Z: non-duality

数字が大きいものが新しく、また小さいものを内包する関係 ($7A/Z > 6R > 5A > 4D > 3L > 2E > 1M$) である。これらは数字を抜いた頭文字をとって MELDARA (あるいは MELDARZ) として、バスカーの著書では表記される。これらの表記は、後述する CR / DCR / TDCR / PMR などの略語と同様に、バスカーの思想の初学者にとっては、難解さを印象づけて心理的負荷を高める参入障壁になっている。

そこで、これまでの研究¹でも言及してきたバスカーの思想の3つのフェーズ (局面) とこれらの弁証法的展開との対応関係をあきらかにすることによって理解をふかめるとともに、バスカーの思想の変遷に対する批判的実在論者からの評価をあきらかにする。

バスカーの思想の第1のフェーズは、基礎的批判的実在論 (basic/original Critical Realism: CR 期) である。1Mと2Eと3Lとがそれに対応する。第2のフェーズは、弁証法的批判的実在論 (Dialectical Critical Realism: DCR 期) である。4Dがそれに対応する。第3のフェーズは、メタ・リアリティの哲学 (the Philosophy of MetaReality: PMR 期) である。6Rと7A/Zとがそれに対応する。

DCR 期から PMR 期にいたるまでに、*From East to West* (2000) でバスカーがみせた思想的転回すなわちスピリチュアル・ターン (spiritual turn) がある。この時期のバスカーの思想については、「超越論的弁証法的批判的実在論」(Transcendental Dialectical Critical Realism: TDCR 期) ともよばれる (Bhaskar, 2000, p. x)。5A がそれに対応する。

DCR 期までのバスカーの思想が1M、2E、3L、4Dであり、スピリチュアル・ターンすなわち TDCR 期 (5A) をへて、PMR 期 (6R・7A/Z) へといたると理解すればよいだろう。したがって、これらは MELDARA (あるいは MELDARZ) と同様に、PMR > TDCR > DCR > CR という内包関係になる。

CR 期のバスカーの思想は、批判的実在論を標榜するすべての論者が共有する科学的研究の方法論あるいは科学哲学として評価されている。

特に、存在論的実在論 (ontological realism)、認識論的相対主義 (epistemic relativism)、判

1 詳細は、水谷 (2020) を参照されたい。

断的合理主義 (judgemental rationality) の3つが基本的な立場として共有される。これらは、CR期における批判的実在論の三位一体 (the holy trinity of critical realism) ともよばれる。

存在論的実在論とは、「階層化され、差異化され、構造化され、かつ変化する実在が現存する」との考えであり、認識論的相対主義とは、「実在についての私たちの知識は常に可謬的である」との考えであり、判断的合理主義は、「外的実在について私たちに情報を伝える諸理論の能力に照らして諸理論を識別するために、私たちが使えるいくつかの方法論的、理論的道具が存在する」というものである (Danermark et al., 2002, 邦訳書, p.18)。

批判的実在論は、バスキアーによって提唱されたものであるが、バスキアー個人が理論的指導者として君臨しているわけではない。批判的実在論者は、批判的実在論の三位一体をいわばマニフェスト (「共同研究要綱」) として共有しつつ、それぞれの関心領域において自由に議論を展開していくことができる。批判的実在論は、「開かれた思考枠組」であり、ひとつの科学哲学プロジェクトであるともいえる²。

DCR期は、批判的実在論の「弁証法化」あるいは「弁証法的転回」とされる (Bhaskar, 1993, 邦訳書, p.607)。

バスキアーの思想がDCR期にいたると、それに対して、批判的実在論者からも否定的な反応がみられるようになる。Bhaskar (1993, 邦訳書) の訳者あとがきによると、「要するに本書をめぐる、無視や傍観、敬遠といった対応を含む、研究の不在が長く続いてきた」 (Bhaskar, 1993, 邦訳書, p.608) という状況であったとされる。

バスキアーによれば、「弁証法的批判的実在論の

場合、同一性より差異性を、ポジティブ性よりネガティブ性を、現在より不在を、全体性の諸相面より全体性そのものを、関係項より関係性を、行為者性より構造規定を優先する」という (Bhaskar, 1993, 邦訳書, p.462)。水谷 (2020) では、このようなDCR期のバスキアーの思想は、論理展開が明快なCR期にくらべると「いかにも難渋」であり、「西洋哲学の文脈では理解されにくい異質性や東洋哲学的な超越性があり」、それによって、否定的な反応がひきおこされていることや、「のちにバスキアーの思想がみせるスピリチュアル・ターンにつながる伏線になっている」ことを指摘した (水谷, 2020, p.37)。

CR期のバスキアーの思想 (CR期における批判的実在論の三位一体) がマニフェストとして批判的実在論者に共有されるという位置づけであることに対して、DCR期 (弁証法的転回) 以降のバスキアーの思想は、共有されるべきものとしては評価されていない。DCR期以降のバスキアーの思想は、バスキアー個人の思想的展開 (転回) として批判的実在論者のあいだではとらえられているようである。

このことは、先に指摘したように、批判的実在論が、それを標榜する論者が特定の理論的指導者に追従する属人的あるいは党派的思想ではないことや、共有されたアイデアをもとに自由に議論を展開できる「開かれた思考枠組」であり、ひとつの科学哲学プロジェクトであることを裏づけている。批判的実在論者にとってバスキアーは、共有されるアイデアの枠組みを提示した提唱者 (最も重要な提唱者) のひとりにすぎず、その思想の展開 (転回) が自由な議論の対象として賛否の俎上にあげられることについて、バスキアーもまた、例外とはならないのである。

特に、スピリチュアル・ターン以降 (TDCR期～PMR期) のバスキアーの思想については、その傾向が顕著であり、たとえば、セイヤー (Sayer,

2 ここで、「共同研究要綱」「開かれた思考枠組」は、Danermark et al. (2002) の邦訳書の「監訳者あとがき」の表現による (Danermark et al., 2002, 邦訳書, p.331)。

A.) は、スピリチュアル・ターンやメタ・リアリティの哲学について、「私ならびに他の多くの批判的実在論の社会学者たちは、自分たちの研究にとってあまり有益なものだとは思っていない」という (Sayer, 2000, 邦訳書, p. ii)。

Ⅲ スピリチュアル・ターン

バスカーのスピリチュアル・ターンのきっかけについては、Bhaskar with Hartwig (2010, p.146) にくわしい。バスカーは、1994年に休暇先のキプロスで体調をくずし、代替療法としてうけた「Reiki (レイキ：霊気)」の施術によって、「新しい世界がひらける経験」をしたという。そのとき、バスカーは、Reikiとともに「超越瞑想 (transcendental meditation)」も体験している。Reikiとは日本人が創始した「手かざし」による民間・精神療法であり、超越瞑想とはインド人が創始したヒンドゥ教に由来する瞑想法であり、いずれも世界中にひろがっている精神運動 (スピリチュアリズム) の一種である。この個人的かつ内面的な出来事を契機として、バスカーは東洋的な神秘主義や精神運動に関心をよせていったようである。

そして、バスカーは、*From East to West* によって、スピリチュアル・ターンを表明する。

バスカーは、*From East to West* の序文において、本書の最も重要なテーマは、「人間は本質的に神 (唯一無二の存在) である」という (Bhaskar, 2000, p. ix)。人間は本質的に、自由であり、すでにさとっている存在であるが、その自由とさとりとが外発的で他律的な諸々の決定によって圧殺されているという³。

3 “The essential thesis of this book is that man is essentially God (and therefore also essentially one, but also essentially unique); and that, as such, he is essentially free and already en-lightened, a freedom and enlightenment which is overlain by extraneous, heteronomous determinations which both (a) occlude and (b) qualify this essential fact.” (Bhaskar, 2000, p. ix)

ルソー (Rousseau, J. J.) の『社会契約論』(1762)における有名な一節である「人間は生まれながらにして自由であるが、いたるところで鉄鎖につながれている」を想起させる表現であるが、バスカー自身も本書において、人間の真なる自由と解放との追求において、(ルソーにも由来する) 急進的自由主義的な西洋思想 (radical libertarian Western thought) と神秘的な東洋思想 (mystical Eastern thought) とを融合させ、ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動との調和をはかろうとしていることをあきらかにしている (Bhaskar, 2000, p. ix)。

Ⅳ ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動と

Partridge ed. (2004) によれば、ニュー・エイジ思想とは、「一般的な位置づけでは、ニューエイジはグノーシス主義、ロマン主義、神智学が近代的に再編されたものに相当する」とされる (Partridge ed., 2004, 邦訳書, pp.428-429)。

井上編 (2005) によれば、ニュー・エイジ運動とは、「欧米、とりわけアメリカで1970年代以降に広がった社会・文化運動であり、多様な信念や実践の総称である。この運動は、1960年代に欧米の若者の間で広まった対抗文化 (現状の社会体制や価値・規範に異議申し立てをする社会・文化運動)、その中でも人間に内在するスピリチュアルなものを重視し、『意識変容が社会変革につながる』と主張する人びとがその源流の一つである」とされ、「ニューエイジにはヒンドゥー教、仏教といった東洋思想の影響も強くみられる。さらに、1960年代以降に欧米で発展した東洋系の新宗教運動や人間性心理学からの影響も大きい」とされる (井上編, 2005, p.410)。

対抗文化については、「英語のカウンターカルチャーの翻訳である。1960年代の米国に端を発し、米国、日本などの先進資本主義国において、

その社会における支配的な文化に対してのオルタナティブな文化を模索した運動文化である。高度産業社会、高度管理社会などへの反発から、主として中産階級の若者が自由を求めた。外見的特徴としては、長髪にひげ、そして汚れたTシャツとジーンズといったいでたちの人が多く、ヒッピーと呼ばれた。米国の場合、白人の若者が先祖が黒人にした行為への罪意識が根底にあり、倫理的側面も強かった」とされ、「具体的に対抗文化の運動としては、次のようなことがあげられる。黒人解放運動、女性解放運動、同性愛解放運動、フリーセックス、ヴェトナム反戦運動、コミュニケーション、ヒッピー、ドラッグ、マリファナ、ロックミュージック、フォークソング、自然回帰、エコロジー、フェミニズム運動、住民運動、東洋宗教など」であるという。「ヴェトナム戦争の終結や、石油ショックなどで、対抗文化は下火になったとされるが、その後の公害問題などの住民運動、環境保護運動などのNGO、NPOなど多方面に影響を与え続け、「さらに、コミュニケーション運動や東洋宗教などの流れから、宗教界にも大きな影響を与えており、ニューエイジ運動や精神世界といわれる運動への参加者にも対抗文化の経験者が少なくない」という(井上編, 2005, pp.347-348)。

島藪(2007)では、特にアメリカにおけるニュー・エイジ思想の周辺にあるスピリチュアル運動とりあげている。それは、ヒューマン・ポテンシャル運動、トランスパーソナル心理学、ニューサイエンス、ニューエイジ・サイエンス、ネオ・ペイガニズム、フェミニスト霊性運動、ディーブ・エコロジー、ホリスティック医療運動、マクロバイオティック、超越瞑想(TM, Transcendental Meditation)、神智学協会(ブラヴァツキー夫人)、人智学協会(ルドルフ・シュタイナー)、クリシュナムルティ・ファウンデーション、ラジニーシ運動、グルジェフ・ファウンデーション、仏教的瞑想・共同体、レイキ、気功・合気道、UFOカル

トなどである(島藪, 2007, pp.36-41)。

島藪(2007)が指摘したこれらのニュー・エイジ周辺のスピリチュアル運動のなかには、スピリチュアル・ターンのきっかけとなったレイキや超越瞑想など、スピリチュアル・ターン以降のバスカーに関連する項目が少なくない。

スピリチュアル・ターン以降のバスカーには、みずからの父方のルーツであるインドの思想からの影響もみられる。なかでも、8世紀に活躍しインド最大の哲学者ともいわれるシャンカラ(Shankara, A.)の名前をあげながら、絶対的存在(absolute)へとむかう道を模索している(Bhaskar with Hartwig, 2010, p.148)。バスカーは、シャンカラの思想から、仏教やキリスト教、イスラム教といった個別の宗教による真理はordinary truthであり、その深層に諸々の宗教に共有されるhigher truthがあるとする(Bhaskar with Hartwig, 2010, p.151)。

DCR期にバスカーが到達したトータリティ(totality:全体性)の思想やPMR期にバスカーが到達した非二元論(non-duality)の思想には、シャンカラのいう不二一元論(アドヴァイタ:advaita, absolute monism)の思想⁴とつうじるものがある。また、スピリチュアル・ターン以降のバスカーの思想には、シャンカラに由来するとおもわれる用語が散見される。それは、avidya, dharma, karma, maya, moksha, yogaなどである。バスカーの用語によれば、avidyaとはignoranceを(Bhaskar, 2000, p.5)、dharmaとはvocational callingを(Bhaskar with Hartwig, 2010, p.2)、karmaとはa set of circumstance that you have to accept / the presence of the past / the nature of the context under which you operate / the conditions you inheritを(Bhaskar with

4 中村(1989, p.226)を参照されたい。

Hartwig, 2010, p.2)、maya とは illusion を (Bhaskar, 2000, p.5)、moksha とは liberation を (Bhaskar, 2000, p.3)、yoga とは union を (Bhaskar, 2000, p.6)、それぞれの意味するところとしている。なお、中村 (1989) によれば、avidya とは無明や無知 (p.535)、dharma は個我の属性 (p.162) / 過去の善業 (p.374) / 教令・理法・法 (p.582) / 特性 (p.700) / 義務 (p.721)、karma とは業 (p.512) / 対象を得ようとかあるいは避けようとする実際の行動 (p.542)、maya とは幻影 (p.420) / 不思議な霊力 (p.788)、moksha (mokṣa) とは解放 (p.733) / 解脱 (p.751)、yoga とは dhyāna (瞑想/禪定) に達する方法、などといった意味でシャンカラがもちいている。おおよその意味の一致がみられるので、バスカーの用語を理解するために、シャンカラの哲学における用語を参考にしてもよいだろう。

Partridge ed. (2004) によれば、シャンカラの不二元論からトランスパーソナル心理学への影響が指摘される (Partridge ed., 2004, 邦訳書, pp.506-507)。ケン・ウィルバー (Wilber, K.) は、自身の思想をこのトランスパーソナル心理学からインテグラル理論へと発展させた。ウィルバーの理論は、「すべての宗教は教義、経験において深い構造を共有しているという信念に依拠している」とされ (Partridge ed., 2004, 邦訳書, p.507)、個々の宗教の深層に諸々の宗教に共有される higher truth があるとするバスカーのシャンカラ思想の理解とも合致する。

次に、ニュー・レフト運動とは、一般的に、従来の左派政党とは一線を画した急進的な左翼運動のことと理解されるが、大嶽 (2005) では、「イギリスではニュー・レフトの語は通常、『ニュー・レフト・レビュー (NLR)』誌に結集した知識人グループという極めて限定的な意味で使われる」とされ、これを狭義のニュー・レフトとし、それ以外のグループをふくめた場合には広義の

ニュー・レフトとしている (大嶽, 2005, p.1)。

バスカー自身は、NLR 誌に Bhaskar(1975) として掲載論文があり、大嶽 (2005) の用語における狭義の意味においても、ニュー・レフト運動につらなる哲学者として位置づけることができる。

Chun(1993)によると、「大雑把に言って、イギリスのニューレフトを構成する主要な流れは以下の三つである。(1) 反体制的な共産主義、これは労働者階級の文化や政治、そして、それ以外の一九世紀以来の国内的な急進主義の伝統を基礎にしている。(2) 独立系の社会主義、これはオックスフォード大学やケンブリッジ大学出身の専門家的中産階級の急進主義と、ロンドンのポピュリズム [民衆主義] 的抵抗運動の伝統とが融合するなかから生み出されたものである。(3) 理論的なマルクス主義、これは古典的な国際主義と、ヨーロッパ大陸の西欧マルクス主義の諸潮流の影響を受けたものである」とし、「それ以外の構成要素、たとえば、革命的キリスト教思想、社会主義フェミニズム、環境保護への政治的取り組み、サブカルチャー [下位文化] ないしカウンター・カルチャー [対抗文化] の美意識といった要素も運動には顕著に見られた」とされる (Chun, 1993, 邦訳書, pp.16-17)。

大嶽 (2005) にも、イギリスにおけるカウンター・カルチャーとニュー・レフトの思想や政治運動との関係性についても示唆があるが (大嶽, 2005, p.2)、Chun(1993)においては、カウンター・カルチャーとニュー・レフトとの関係性が明示されている。

Chun (1993) は、ニュー・レフト運動が後に女性運動、平和運動、人種差別反対運動、環境保護運動などへと転化していったこともあきらかにしている (Chun, 1993, 邦訳書, p.329)。これらは、先にのべたようにニュー・エイジ思想の源流となったカウンター・カルチャー運動の具体的な展開とも一致している。このことから、ニュー・

エイジ思想のすそ野の広がりには、ニュー・レフト運動やカウンター・カルチャー運動に関係するものが少なくないことが理解できる。

スピリチュアル・ターン以降のバスカーには、気象変動やディープ・エコロジー⁵、インテグラル理論⁶、ジャンカラの思想、あるいは神智学 (theosophy) などへの関心や接近がみられるが、上述のような対抗文化 (カウンター・カルチャー) 運動や、それに由来するニュー・エイジ思想の歴史的な広がりや関連、影響の大きさをふまえることで、そのような関心や接近の背景や文脈を理解することができるだろう。

このようにみても、ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動とがともに、カウンター・カルチャー運動との関係性のなかで生成されてきたことがあきらかであり、両者はともに支配的な価値観や社会体制からの解放や自由をもとめる社会現象ないし社会運動であったといえるであろう。

スピリチュアル・ターン以降のバスカーの思想的展開は、急進的自由主義的な西洋思想と神秘的な東洋思想とを融合させ、ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動との調和をはかろうとするスピリチュアル・ターンにおけるバスカーの思想的転回からは必然の結果であったといえる。Chun (1993) の指摘によれば、オックスフォード大学で哲学を学んだバスカーは (2) の「独立系の社会主義」の系譜にふくめることができ、初期においては、ニュー・レフト運動の潮流につらなる哲学者であったバスカーが、その思想的展開のなかでニュー・レフト運動と親和性のあるニュー・エイジ思想をとりいれたということが指摘できる。ニュー・レフト運動とニュー・エイジ思想とは、カウンター・カルチャー運動という共通の源流をもっており、バスカーが融合や統一を探求するまでもなく、両者はもともとから親和性のあるものであった。

5 Bhaskar et al. (2010)

6 Bhaskar et al. (2015)

V 鈴木大拙とバスカーと神智学と

西洋哲学や近代合理主義によっては理解しづらいスピリチュアル・ターン以降のバスカーの思想であるが、日本的思考の文脈のなかにおくことによって、バスカーの個人的・内面的な思想の転回と展開についての理解 (アブダクション) をふかめることができる。

水谷 (2020) では、バスカーの思想が東洋的あるいは日本的な思考方法と親和性があることを指摘し、西田幾多郎の「純粹経験」とバスカーのトータリティ (totality) の理論、あるいは、鈴木大拙の「即非の論理」と否定性 (negativity) の論理とのあいだの類似性などに言及している (水谷, 2020, p.44)。

即非の論理とは、以下のように公式化された考えである。

A は A だというのは、

A は A でない、

故に、A は A である。

(鈴木, 1944, 文庫版 2010, p.327)

この論理は、末木文美士によると「矛盾律、同一律に反する」が、「否定を媒介としての肯定、否定を含んだ肯定」という禅的解釈 (大拙的な禅理解) の論法として評価される (鈴木, 1944, 文庫版, 2010, 解説, p.470)。

即非の論理は、A の否定や不在によって A の実在性を規定するという意味において、「否定性 (negativity)」や「不在 (absence)」の概念によって「実在」が非二元的なトータリティ (totality: 全体性) の世界であることを提示した DCR 期のバスカーの思想につうじるものがある。

先に引用した井上編 (2005) が指摘するように、1960 年代の欧米でのカウンター・カルチャー運動やそれに続くニュー・エイジ思想においては、

ヒンドゥ教や仏教のような東洋宗教・東洋哲学からの影響がある。とりわけ仏教については、Zen (禅) の人気が高く、それは鈴木大拙の *Zen and Japanese Culture* (1938, 邦訳書名『禅と日本文化』) による影響が大きいとされる。

安藤 (2018) によると、鈴木大拙は、仏教思想の研究者であり禅の実践者であると同時に、モニズム (monism: 一元論) や神智学あるいはスエデンボルグのような神秘主義にも関心をよせる側面があきらかにされている。

年譜によると、鈴木大拙は、27歳で渡米し、雑誌 *Monist* を創刊したポール・ケーラス (Carus, P.) のオープン・コート出版社の一員となり、そこで38歳まで翻訳や通訳の仕事に従事している⁷。*Monist* は、西洋哲学における二元論に対して一元論を標榜し、チャールズ・サンダース・パース (Peirce, C. S.) やウィリアム・ジェイムズ (James, W.) のようなプラグマティズムの思想家に紙面を提供した (安藤, 2018, pp.58-61)。ケーラスが提唱するモニズムは、バスカーの思想におけるトータリティの概念と類似する。

パースは、批判的实在論における重要な推論方法である「アブダクション」の提唱者であり、ジェイムズは西田幾多郎の「純粹経験」の思想に影響をあたえた。安藤 (2018) によると、パースの父親もジェイムズの父親もスエデンボルグ主義者であったとされる (安藤, 2018, p.318)。鈴木大拙は、41歳で結婚した妻のピアトリス・レイン (Lane, B.) を介して、神智学やスエデンボルグの思想にも接近している⁸。神智学への接近は、スピリチュアル・ターン以降のバスカーにもみられる。バスカーの両親は神智学協会 (Theosophical Society) の一員であったし、バスカーの父はフリーメイソン (Freemasonry) の一員でもあった

とされる (Bhaskar with Hartwig, 2010, pp.3-4)。

これらは脈絡のない符合であるが、鈴木大拙の生涯や思想とともにバスカーの生涯や思想の展開を探究すると、東洋と西洋あるいは合理主義と神秘主義といった二項対立の融合という文脈において両者に関係性をみいだすことができ、その深層には東西諸宗教の融合をはかる神智学の影響も指摘できる。

VI おわりに

バスカーの思想において一貫してみられるのは、実践 (praxis) による社会変革や人間解放に対する志向性である。

CR期においては、社会と人間との相互作用によって社会システムが再生産 (転態) されるという「社会活動の転態モデル (the Transformational Model of Social Activity: TMSA)」を提示し、社会が人間の活動に対する条件であるとともにその成果でもあるという「構造の二重性 (duality of structure)」や、人間の活動が意識的な生産活動であるとともに無意識のうちに社会を再生産する活動でもあるという「実践の二重性 (duality of praxis)」をあきらかにした。

DCR期においては、非二元論的世界観 (トータリティの世界) に気づいた人間が社会的制約から解放されるための自由への弁証法 (批判的实在論の弁証法的転回) の契機として、転態的实践 (transformative praxis) を提示した。

TDCR期からPMR期には、真なる人間の解放、自由、自己実現を達成する (それらの「不在を不在化させる」) ための非二元論の哲学に到達し、ありとあらゆる二元論的世界観 (demi-reality) を社会的実践によって克服する道を提示した。

本稿で言及したように、ニュー・エイジ思想とニュー・レフト運動とは、ともに源流としてカ

7 公益財団法人松ヶ岡文庫ウェブサイト (<http://www.matsugaoka-bunko.com/ja/history/index.html>) より (2020年12月10日閲覧)。

8 吉永 (2019) を参照した。

ウンター・カルチャー運動に由来する部分があり、また東洋思想からの影響についても共通する部分がある。実際には、*From East to West*でバスカーが表明するまでもなく、これらは一元論において、すでに融合され調和されていたのである。

スピリチュアル・ターン以降のバスカーの思想が多く批判的実在論者にうけいれられなかったのは、それがバスカー自身にとってのみ意味のある個人的営為であり、共有されるべきものではないととらえられたからではないだろうか。しかし、また一方では、このようなバスカーの個人的営為による転回を好意的にうけとめた批判的実在論者たちからは、自身の個人的な宗教的信念（信仰）と批判的実在論（特に批判的実在論の三位一体）との関係をあきらかにした Archer et al. (2004) が提示されている。

バスカーにとって、スピリチュアル・ターンによって東西の思想の融合や調和をもとめたことは、そのルーツが西洋（イギリス）と東洋（インド）とにある自身のアイデンティティを再確認する実践であり、その実践をとおして自身のうちに東西の思想の融合と調和とをみいだしたのかもしれない。

バスカーの思想は、どの局面においても常に独創的であり、われわれはバスカーが「自身の思想」を探究した結果を共有したにすぎないのだと理解すれば、バスカーの思想的展開（転回）を前にとまどうことはなくなるだろう。

バスカーが自身のアイデンティティによってスピリチュアル・ターン以降の思想を展開したのであれば、その思想への理解を深めるためにわれわれが自身のアイデンティティである日本的思考の文脈によることは「有益」であろう。バスカー個人を偶像化せず、その思想を教条化せず、自身の日常（世俗）のなかにある思考方法によってバスカーの思想への理解（アブダクション）をふかめる実践こそが、水谷（2020）において表明した

世俗的バスカリアン（secular Bhaskarian）の方法である。批判的実在論が開かれた思考枠組であり、ひとつの科学哲学プロジェクトであったのだとすれば、もとより批判的実在論は世俗主義（secularism）だったのである。

【参考文献】

- Archer, M.; Collier, A.; and Porpora, D. (2004), *Transcendence: Critical Realism and God*, Routledge.
- Bhaskar, R. (1993), *Dialectic: The Pulse of Freedom*, Routledge (2008)（式部信訳, 2015, 『弁証法—自由の脈動—』作品社）.
- Bhaskar, R. (2000), *From East to West: Odyssey of a Soul*, Routledge (2015) .
- Bhaskar, R.; Frank, C.; Høyer, K. G.; Naess, P.; and Parker, J. (2010), *Interdisciplinarity and Climate Change: Transforming Knowledge and Practice for Our Global Future*, Routledge.
- Bhaskar, R. with Hartwig, M. (2010), *The Formation of Critical Realism: A personal perspective*, Routledge.
- Bhaskar, R.; Esbjörn-Hargens, S.; Hedlund, N.; and Hartwig, M. (2015), *Metatheory for the Twenty-First Century: Critical Realism and Integral Theory in Dialogue*, Routledge.
- Bhaskar, R. (2016), *Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism*, Routledge.
- Chun, L. (1993), *The British New Left*, Edinburgh University Press（渡辺雅男訳, 2009, 『イギリスのニューレフト—カルチュラル・スタディーズの源流—』彩流社）.
- Danermark, B.; Ekström, M.; Jakobsen, L.; and Karlsson, J. C. (2002), *Explaining*

Society: critical realism in the social sciences, Routledge (佐藤春吉監訳, 2015, 『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論—』ナカニシヤ出版) .

Partridge, C. ed. (2004) , *Encyclopedia of New Religions: New religious movements, sects and alternative spiritualities*, Hudson Plc (井上順孝監訳, 2009, 『現代世界宗教辞典 新宗教、セクト、代替スピリチュアリティ』悠書館).

Sayer, A. (2000) , *Method in Social Science: A Realist Approach*, Revised 2nd Edition, Routledge (佐藤春吉監訳, 2019, 『社会科学の方法—实在論的アプローチ—』ナカニシヤ出版) .

安藤礼二 (2018) 『大拙』講談社.

井上順孝編 (2005) 『現代宗教事典』弘文堂.

島蘭進 (2007) 『精神世界のゆくえ—宗教・近代・霊性—』秋山書店 .

鈴木大拙 (1944) 『日本的霊性』角川ソフィア文庫 (2010).

中村元 (1989) 『シャンカラの思想』岩波書店.

Bhaskar, R.(1975), “Feyerabend and Bachelard: Two Philosophies of Science”, *New Left Review*, Vol.94, pp.31-55.

大嶽秀夫 (2005) 「イギリス新左翼の思想と運動—前期ニュー・レフト (一九五六～一九六三) を中心として—」『法学論叢』第156巻第3・4号, pp. 1-24.

水谷覚 (2020) 「批判的实在論と会計転態論と」『帝塚山経済・経営論集』第30巻, pp.31-55.

吉永進一 (2019) 「大拙夫妻と神智学—大拙英文日記とピアトリス資料を参照して—」『公益財団法人 松ヶ岡文庫研究年報』第33号, pp. 1-24.